

第16回ホリスティック医療塾レポート

日時：2017年6月25日（日） 午前10時30分～午後0時

場所：大阪市北区民センター

テーマ：心に残る事例・症例

司会進行：愛場庸雅（日本ホリスティック医学協会関西支部）

医療にかかわっている皆さんには、印象に残っている事例、忘れられない症例が多数あるかと思います。また、患者さんやクライアントさんから逆に学びを得たこともあるかと思います。今回の医療塾は、そのような事例を語り合っただき、ホリスティックな視点から、皆でシェアしてみました。参加された方から出た事例をいくつか紹介します。

- ・自己免疫疾患の方。症状は痛みなのだが、こころの問題が大きく関与しているようである。「症状は治癒力の表現である」ことを気づかされた。
- ・肺がん末期で緩和ケア病棟にいる85歳の方。大の阪神ファンで、オピオイドを打ち、酸素吸入をしながら、ナイターを見に行く。「生きる元気の素は？」と考えさせられる。
- ・比較的若い二人の同じようなステージの子宮がん患者さん。一人は治癒し、一人は治らなかった。治った人は、私にはすることがあるという意識があり、体の声が聞け、家族の一致団結があった。治らなかった人は、「なぜ私がこんな病気に・・・」「とにかく治りたい」から抜け出せなかった。
- ・末期の人が、自らの最後を意識の深層で決めているのではないかと感じられたケース。
- ・「楽になるように」とヒーリングをしたら、「楽になった」と言って呼吸停止した方。気に対するアプローチは魂にも響くのではないか。
- ・アスペルガー障害の10歳児。セラピストに不満が多かったが、遊びを通じて、セラピスト対クライアントという関係から外れることで、心を開き始めた。我々は、「相手のことに気がついていない」だけなのではないか。

心のあり方や命の妙への関心とともに、体質や遺伝子、量子力学レベルでの解明に期待したいという感想もありました。